
インフィニット・ストラトス ~ 孤高の一夏 ~

フィルム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス〜孤高の一夏〜

【Nコード】

N4333R

【作者名】

フィルム

【あらすじ】

行方不明になった一夏は最強の力を手に入れ発見される

孤高の強さを得た一夏は徐々に変化し他者を圧倒する存在になった。

設定（前書き）

更新速度は遅いですが見ていってください

設定

織斑 一夏

性格

雲雀恭也（家庭教師REBORN）の性格が若干まろくなった感じが群れていても咬み殺しはしないが無言のプレッシャーを与える一応誰にでも優しい

好きな物

小動物 笑顔 怯える顔 桜

嫌いなもの

泣き顔 五月蠅い人間 人が多い場所 自分を強いと思っている弱い人間

概要

幼い頃に行方不明になり役2年後に見つかる

行方不明時に家庭教師REBORNの世界にいて雲雀恭也に鍛えてもらい性格まで似てしまった。

原作よりあつさりとした性格で基本は怒らない……と言うより人にあまり興味をもたない

雲雀恭也から貰ったトンファアは常に持ち歩いており、雲のリングとボックスは隠している

普段怒らない故一度怒りの沸点に達すれば気が済むまで咬み殺し続ける

小動物が大好きで小動物のコスプレをしている人間がいれば男女問

わず拉致る危険人物

戦闘スキルは高い、勿論戦闘狂

慣れ親しんだ友人には天才的なバ力と呼ばれることがある

〈機体説明〉

名前 紫雲しうん

武装

トンファー × 2

自立機動兵器『球針』 × 4

腕部拘束用兵器『ロール』 × 2

概要

突然あらわれた男に渡されたIS

不明な点が多いが一夏の専用機になる

武装とその名前は雲雀恭也のボックス兵器からきている

腕部拘束用兵器『ロール』はシールドエネルギーを消費すれば増殖する

自立機動兵器『球針』はボディ四力所に砲口が搭載され4つを合体させると名の通り円上に針があるようになり360°砲撃が可能
一夏の脳波で動く

トンファーに積まれた特殊技能『ヌーヴォラ』によりシールドエネルギーを吸収して自分のエネルギーに変換する
そしてトンファーには様々な隠し武装があり『剣』『ライフル』『鎖』『ニードル』が搭載されている

カラーは紫色でヌーヴォラを発動した場合橙色になる

クラスメイトは全員女その1（前書き）

早速一話投稿しました。

読者の期待に応えられるよう頑張ります

それと一話ごと半分にします

しかし設定だけで役2000アクセスとは…

クラスメイトは全員女その1

おかしい…どこで僕は間違ってしまった？

僕は幼い頃、師匠に鍛えてもらって、面倒をかけているIS関係で働く姉のボディガードにでもなろうかと考えつつ藍越学園に向かった。

恐らくここで間違っただろうと僕は思う

師匠なら絶対こんなヘマはしないし師匠がいたら僕が殺されるけどそれより今の状況の方が嫌だ

「君たち…僕は動物園のパンダか何かなのかい…？」

僕の殺意混じりの発言でクラスの全員が実質固まった。

IS学園…まあISは基本女性しか機動できない欠陥兵器なのに僕がここにいる理由

それは『興味本位でISを触ったら起動した』…実に馬鹿らしい話しだよ

つまり教室を通り越してこの学園の生徒は皆女子

唯一人男の僕がいるのが珍しいからその視線『には』納得するしかない

けど僕はすべてにおいて人が多い所が嫌いで学校も嫌い5人以上集まっていたら僕に取って迷惑千万でしかない

「あつ、あの、織斑君…？自己紹介してもらえるかな？」

「……………」

僕の殺意に怯えつつ僕に自己紹介を求める副担任の山田真耶

名前は覚えやすいからいいけど本当にこの人は見た目含めて教師なのか疑いたくなる

黙って視線を向けるとヒツと怯える、原因は僕だけど見てることちは頭が痛くなる

「……………織斑一夏」

一番前だからよく解らないけどたぶんクラス全員がポカーンとしていると思う

何故なら目の前の山田副担任がそんな表情をしているからだ。

僕は必要最低限の情報しかださない主義もあるけど正直めんどくさい
できることなら日差しを浴びて寝ていたい

「それだけですか…?」

山田副担任の言葉に同意なのか一人を覗くクラス全員に『もっと何か言ってよ』みたいな視線が僕に向けられる

「……好きな物は小動物、以上」

僕が言い終えて後ろを見てると背後から若干の気配が近づいてなにかを振り上げる音を感じて、隠し持っていたトンファーで防ぐ

「お前はもう少しまともな自己紹介をできないのか馬鹿者」

「それよりも僕が武器を持つてることに驚かないんだ」

僕が防いだ物は出席簿らしき物

そしてそれで僕を叩こうとした女性は黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているが過肉厚ではないボディライン。組んだ腕。僕より鋭い吊り目

間違いない僕の姉、織斑千冬本人だ

僕はトンファーをしまい席につく

誰も驚かないことに逆に僕が驚いたよ

「諸君、さっきは私の愚弟が迷惑をかけたな
私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。」

私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。
出来ない者には出来るまで指導してやる。

私の仕事は弱冠一五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

……ワオ、これは驚いた。
いきなり姉弟つてことをバラし始めたよ
特に最後の『逆らつてもいいが、私の言うことは聞け。いいな』は
矛盾しまくりだ。要は逆らうなと言えは早いのに、しかし。教室は
黄色い声援が響いた

「キヤーーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

………うん

「ずっとファンでした！」

これは……

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

変態が多い……と解釈をしまいかねないが間違いではない気がするよ

特に最後の、千冬姉さんは僕の姉であつて君の姉ではないし、どこから来たとか興味ないから

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

じゃあ最後の君死になよ、少なくとも不機嫌オーラを放つ姉のために

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

たぶんどのクラスもそうだと思うけどあれかな？これだけ馬鹿者つてもしかして僕も入ってるわけ？ねえ……それは嫌なんだけどそれにその反応は逆に興奮させるだけだと思うんだけど

「きゃあああああつ！お姉様！もつと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように黙て〜！」

……もういつそ死んでしまえと思う
なに今の？

ねえ？これ僕じゃなくても怒っていいよね？そして最後のは本当に

つけあがらないように咬み殺すよ？このクラスおかしいの？

「その辺にしる馬鹿者

そろそろ私の愚弟が怒りかねん」

「もしかして…織斑君ってあの千冬様の弟…？」

「……………何バラしてるの？」

「ああ…それと愚弟を婿にしたいなら私を倒してからにしる」

…訂正、どうも僕の姉までおかしいようだ
しかも無視したし

はあ…僕はどうなるのやら

クラスメイトは全員女その1（後書き）

すいません、たぶん皆さんは『性格全然違うだろ!!』と
思っている気がします

しかしそれでも続きを待ってくれる人がいれば嬉しいです

クラスメイトは全員女その2（前書き）

前回に比べてクオリティが下がっている気がしますので注意してください

今回結構原作から離れます

読んでくださる方、感想をくれた方ありがとうございます

クラスメイトは全員女その2

「はぁ……疲れた」

僕はついさっきまで女子達の質問に答え続けていた。相手が男なら容赦なく咬み殺していたけど相手は女子、さすがに手を出すわけにはいかないから千冬姉さんに今晚一緒に寝ると言った瞬間、女子に『質問は放課後にしろ』の一言でこの地獄から脱することができた。唯一つ問題なのが『一緒に寝る』って言った後の千冬姉さんの視線が獲物を狙う獣のような感じになっていること

「昔は風呂も一緒に入っていたな……あれ？その頃から……だよな……？」

ダメだ……冷静になれ、冷静さを欠いた奴が死ぬ……よし

「ふぁぁぁ」

そう言えば箒は千冬姉さんとどこに行ってたんだろ？

それにISのデータ収集を彼に頼んで……復習でもしておこうか

「ちょっと、よろしくて？」

「……………」

見た目からして厄介だね、いかにもお嬢様みたいでプライドが高そうで……咬み殺したくなるじゃないか

「訊いてます？お返事は？」

「ふああ……………」

お嬢様らしき人物が僕の机を叩いてキーキー騒いでいる
君は盛った猿かなにかじゃないのかな？

「で…………？君は僕にようがあるの？それと君だれ？ついでに君は喧嘩の対象にならないからね」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表「黙りなよ」ッ！」

僕はセシリアとか言う草食動物に殺気を向けていた。

「イギリス代表候補生……？笑わせないでよ、国一つで威張らないでよ…相手が女性でも咬み殺すよ」

僕はトンファアを構える

弱い癖に強く見せて偉そうにする……そう言うのは許せないね

「なっ！」

「弱い君には無理だと思うけど、決闘でもするかい？クラス代表者を決める時に」

僕の発言で草食動物ーもといセシリア・オルコットの闘争本能に火をつけたらしい

「いいですわ！もしあなたがたくしに負けたら奴隷にしますわよ」

奴隷…ね、多少楽しめる相手ならいいけどこのところ雑魚しかないから…楽しませてもらうよ

「ふうん、じゃあ僕はハンデとしてシールドエネルギーを50%から始めるよ」

僕の発言で今度はクラス全体がざわめく
確かあの草食動物のISは確か遠距離仕様、名前は忘れたけどイギリス第三世代型

恐らく無謀だと思われるね…不快だ

「男が女より強いだなんて、この国の殿方はジョークセンスがあるのね」

どうもこの草食動物は大きな勘違いをしているらしい
本当の強さは男も女なんて些細なものでしかなく関係ない
本当の強さは最強の名に相応しい人間が持ち弱い者を守る
それが『強さ』

「僕は冗談はあまり言わない主義でね……」

僕はトンファーをしまい教室を出ようとすると草食動物が僕の前に
立ち、邪魔をする

「……何？」

「どこへ行く気ですか？まさか授業をサボる気で…？」

「僕がどこに行こうと君には関係ない」

「じゃあね草食動物」

僕は足早と教室から出て、ある場所に向かう『僕に接触を求める男』が指定したポイントへ

「君かい？僕を呼んだのは」

僕が呼ばれたのは廃工場、しかもご丁寧に工場から半径1km以内は人が入らないようにしている

つまり特殊な力をもつ人間が権力を持つ人間
まあ僕にとってはどうでもいいことだけど

「ねえ…隠れてるのはわかってるから出てきてくれないかな…？咬み殺すよ」

「サスガダナ、オリムライチカ
サスガヒバリキョウヤノデシトイッタトコロカ」

変成器…？声で人物を特定は出来ないけど雰囲気はあの連中に似ている、だけど何故師匠の名を…？

「で…僕にようがあるなら早くしてくれないかな？」

「ソウアセルナ、オマエニワタスモノガアル」

「渡す物…？」

黒い服に顔を包帯で巻いて隠した男が紫色の宝石がついた指輪を僕に投げる

「これは…？」

「ソレハオマエノアイエス『紫雲』ダ」

これが僕のIS…紫雲
しかもこの指輪

「オリジナルの雲のボンゴレリングと同じ形」

「ソウダ、オマエノシショウデアルヒバリキョウヤニメイレイサレ
テナ、サイシンエイノギジュツヲアツメタキタイダ」

「それはご苦労様なこだね……まあ有り難く戴いておくよ」

師匠が僕の為に……あの人そんな柄じゃないのに

「ヤクメハハタシタカラオレハカエラセテモラウゾ」

「そう……君の名前は？」

「ソウダナ……『アンリマユ』トナノラセテモラオウカ」

そう言つてアンリマユは消えた。

彼……中々面白そうだね

「で？姉である私に何か…言うことはないのか？」

「すみませんでした」

僕が学園に帰ってみると何故か混乱状態に陥っていた。

千冬姉さんが差し向けた僕を監視していた諜報部の人間から僕が消えたと報告があつたらしく国家的に問題になりかけていた。

「まったくお前は……100歩譲つて授業をサボることを黙認して

も勝手にいなくなるな、唯でさえ世界的に重要人物なのに……下手をしたら軍まで動くぞ」

「それはご苦勞様なことで、でも僕は『何ものにもとらわれることない孤高の浮き雲』だからね、それにISを受け取りに行ってたんだから許してよ」

僕の言葉に千冬姉さんの眉に皺がよぎった

「アノとんでもスペックで世界の科学者が理論上及び現実的に『有り得ない』とまで言われたあの機体をか」

「うん、まだ完全こそしていないけどシールドエネルギーが尽きたら生命エネルギー……つまり命で動く『LES (Life Energy System)』を搭載するプロトタイプの機体『紫雲』ある意味出鱈目だよ」

僕は千冬姉さんに出されたコーヒーを一口飲む
因みにここは寮長室でこの情報は僕が千冬姉さんが言わない限り外に漏れない

「私としては弟をそんな危険な機体に載せたくないのだがな」

「無理言わないでよ百式のコアが破壊されて雪片式型が中破、世界中の剣職人が修理と強化している今、僕の動きと力に対応できるのが『紫雲』だからね」

「そんなのどうだって良い、私は弟が無事なら国一つ滅んでも構わん」

……ワオ！僕の命が国レベルにまでなってしまったようだ。

たしか去年は47都道府県が46都道府県になってもいいと言ってたけど、これは姉が重病だ
女好きで千冬姉さんが汚されないか不安だけど腕は確かな医者を呼んだほうが良い気がするよ

「僕はこんな所で死ぬ気はないさ
それに僕は『強い』からね、それと『紫雲』の設計図は世界中に回ったんだよね」

「……？ああ、だが造るのは無理だからとりあえず設計図は貰いたい……とか」

「じゃあイギリスはその最先端技術の夢のコラボの出鱈目な機体ね最初の練習相手になるわけだ。首相が泣いて喜んでいるのが目に浮かぶよ」

正確には今にも血を吐きそうぐらい胃を痛めてストレスで頭が沸騰しそうな首相が…… だけど

「やめてくれ、その内首相の自殺が絶えなくなる」

千冬姉さんが溜め息混じり頭を抑える

「それは面白そうだね、イギリスの【ブルー・ティアーズ】中国の【甲龍】フランスの【R・リヴァイヴ・カスタム？】ドイツの【シユヴァルツェア・レーゲン】の4機を相手にする以上に……ね」

「……しかしクラス代表者決定の為に闘うとはな……正直聞いたときは疑ったぞ」

あれ？無視された？まあいいや

「うん、今の内にあの草食動物を潰しておかないとその内壊れてしまう

そうになったら僕でも救いようがない」

「なるほどな……優しいのか厳しいのかわからないな」

「それが僕さ……それより授業は良かったの？」

今は放課後だけど確か書類の為に3限の途中から抜け出して変わりに僕が作ったゲームをやらせたって言ったけど大丈夫なの？たしかあのゲーム脳波で動くシステムだけど敵のレベルを僕用に設定してるから大変だと思うけど

「教師としては駄目だが下手をすれば国家を揺らす一大事になりかねないからな」

「……ああ、部屋どうするの？今日はここで良いとして僕の部屋がないし」

「そうだな……ずっと此処でもいいが個室を用意しよう、それまで悪いが『アイツ』の部屋を使ってくれ」

「……最悪だ」

千冬姉さんが言う『アイツ』は僕に唯一一度だけ勝利した天才少女『織斑 緋也^{ひなり}』もとい『平泉 緋也』は婚約者を名乗る『ITKH ランキング（一夏の危険な人ランキング）』3年連続不動の王者そして趣味が僕のストーカーと僕が使用した割り箸とストローの回収と盗撮で特技は僕の下着の色を当てる変人だ

「あの僕の写真だらけの部屋にいと」

「……すまない」

360°おはようからおやすみまで僕の写真で包まれた空間に誰が好き好んで……ましてや本人が行くと思う？

「私は少し仕事が残っているからまた出るが夕食までに帰ってくる」

「行つてらっしゃい」

僕が認めた天才4人の内3人（姉含む）が変人なのは何故だろう
まあ…頑張ろうかな、守る為に

クラス代表決定戦！その1（前書き）

今回は3つに分けたいと思います

今回の話しは……見てのお楽しみで

来てくれた方と感想を書いてくれた方、ありがとうございます

クラス代表決定戦！その1

「ねえ篤……」

「……………」

「何で無視してるの？僕泣くよ？」

僕は師匠ほど心は強くない、ここは食堂。しかし周りを見れば女子だらけで居心地が悪い
女子にあまり免疫がない僕はこの状況で知り合いが篤一人だし無視されたら本当に泣きかねない

「約束……破った」

「は？」

「放課後私と練習すると約束しただろ！！」

「あー……ごめん、ちょっと国家的問題だったから」

あの後寮長室で各国家に送る書類をやったからね

「今日の放課後空けとくから」

「…………約束だぞ」

「うん」

しかしここの和食美味しいな…………彼の腕には多少劣るけどそこら辺の定食屋より美味しい

「ねえねえ、彼が噂の男子だって」

「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ」

「えー、姉弟揃ってIS操縦者かぁ。やっぱり彼も強いのかな？」

これも一向に変わる気配がない
やはり珍しいのか一定の距離を保ちつつ僕に興味ありますよゝ的な
視線を向けてくる

「お、織斑くん、隣いいかなっ？」

「いいよ」

僕がそう言つと3人は小さくガッツポーズをしていて周囲は妙なざわめきが聞こえた。

食事ぐらい誘えば付き合つのに

「それにしてもおりむー結構食べるんだね」

「のほほんさんもお菓子ばかり食べていたらダメだよ」

しかし昨日は疲れた……早い内に紫雲をテストさせないとね

「いつまで食べている！食事は迅速に効率よく取れ！遅刻したらグラウンド十週させるぞ！」

ああ……丁度いい時に現れたね

「丁度いい所にいたな織斑、政府から『紫雲』のテスト運転をしろ……だそうだ」

偶には政府も面白いことをしてくれるね

「へえ……それは面白そうだね、国の専用機を潰せないのは残念だけれど……久々に楽しそうだ」

「え！？おりむー専用機持ちなの！？」

「すーい」

「一夏……舌なめずりは止めろ、見ているこっちが怖い」

「って言うか織斑くん、誰と闘うの？」

「僕だよ」

僕の言葉でその場にいたみんなが固まった。

と言うより千冬姉さんは知ってると思ったんだけど

「言い方が悪かったね、正確には僕が造った擬似ISで僕のデータが入っている仕組みだよ」

擬似IS『VONGOLA』とは久々に闘うから楽しみだな
世界の重鎮がこのIS学園に集まった。
余程僕のISの性能を見てみたいらしい

「ふう……始めようか」

僕の指輪が輝き、ISが起動し、無駄のないスマートなフォルム
そして薄めの灰色の装甲に2つのトンファー
これはあくまで『起動実験用』だから精々

「織斑……そろそろ出る」

はあ……碌に思考させてくれないのかな？
まあいいけど

「織斑 一夏『紫雲』……行きます」

ピット・ゲートのカタパルトからアリーナに射出される

「相手は隼人さんか」

僕から約200M離れた位置に大型のライフル『G・アーチャーVer・X』を構えた火力特化装甲の『VONGOLA』Ver・テンペスタ

ボンゴレファミリー10代目沢田綱吉の右腕、獄寺隼人モデル
あの草食動物のISタイプと同じだから予習になる、しかもVONGOLAはランダムで選ばれているからよほど僕の運は良いらしい

「行くよ」

『紫雲』に搭載されたトンファアを構えた瞬間、赤いビームのマシンガンが僕を襲う

「くっ……厄介だ」

スラスターを全力で使用し大きな動きで翻弄し徐々に接近し一撃を与える

「かみころっ」

トンファアの一撃をくらった装甲が赤く光り、爆発する

「っ……」

爆風をトンファーで払いのけ、VONGOLAを見据える

「（あつちはまだG・アーチャーと瓜を使っていないのにこの様か）『紫雲』、第一戦闘形態に変更、追加武装無しで『ヌーヴォラ』の使用時間を1分に設定」

《第一戦闘形態に変更、追加武装変更なし
『ヌーヴォラ』システムロード中
制限時間を1分に設定》

灰色の鎧が紫色に変化し、スラスターが2つ追加される
正直勝てる可能性が低いけどやるしかない

「咬み殺す」

僕はトンファーを投げて注意を逸らし一瞬でVONGOLAの背後に周り背部スラスターに片方のトンファーで殴りつけてシステムを発動させる

「ヌーヴォラシステム発動！！」

《Nuvola System Time Limit 1:00》

「咬み殺す」

片方のトンファーでひたすら殴りVONGOLAのシールドエネルギーを吸収し『紫雲』のシールドエネルギーに変換する

《エネルギー40%吸収及び変換率100%》

「これでッ!!」

マズい……腰部スラスターからアレが!!

《敵腰部から自立機動兵器反応確認》

「仕方がないか」

僕はトンファーで追撃をかけたが自立機動兵器『瓜』の赤い砲撃が6ヶ所から放たれる

《エネルギー170%低下

Nuvola System Time Limit 0:23》

「くっ………」

残りのエネルギーが少ない…先にトンファアを回収して…

「グチャグチャに咬み殺す」

僕の意志に反応するかのように鎧の色が変化し始める

「これは……？」

《第一戦闘形態モード（インフニティ）》

鎧の色が紫色から金色に変わりエネルギー残量が と表示される

「面白いね………」

僕はトンファアの仕込み武器の一つ『剣』を発動させVONGOL Aに突撃する

「咬み殺す!!」

僕はVONGOLAの左腕を斬り、右足を突き刺す
VONGOLAはG・アーチャーを僕に構える

「させない」

VONGOLAのG・アーチャーVer・Xの砲撃と同時に僕はト
ンファァでG・アーチャーVer・Xを突き刺した。

「はあああああ!!!!!!」

僕は砲撃を斬って銃口を折り、加速をしながら周りを飛び頭部、体、
腰部を斬りつける

「これでッ!」

あと一撃をいければ僕の勝ちだ……そう思った瞬間、僕の目の前に
モニターが表示され、敗北を意味するブザーが鳴る

《モード 終了、エネルギー残量0%LESS不可能の為戦闘不可と
判断》

「…………へ？」

僕は今啞然としている

は……？エネルギー切れ？

嘘……だよ、だってあと一撃なのに……

「……………そんな」

僕がこんな……ミスを、初歩的なミスをしてしまうなんて

周りを見るとみんな啞然としていた。

僕が……負けた。こんな情けない負け方で

慢心さもあつたし油断もしていたのもあつたかもしれないけど……

「……………クッ」

こんな形で負けるなんて……！！

クラス代表決定戦！その1（後書き）

そう言えばブルーティアーズってラノベだと中距離って書いてあったけどアニメだと遠距離って言っていた。
やっぱ大人の事情でそうなったのかな？

クラス代表決定戦その2（前書き）

長らく放置してしまいました。
事情でケータイが使えませんでした
21時になったら次話を投稿します

クラス代表決定戦その2

「まあ……一夏、そんなに気に病むな」

今の僕は千冬姉さんの気遣いすらダメージになってしまっ
あんな不様な負け方を晒してしまうなんて

「……はあ」

こんな調子じゃあの草食動物にまけてしまっな……

「いち……か？」

「……筹どうしたの？」

「iiiiiii、一夏！……？おまつ、何をしてるんだ！……？」

「何……？」

「ひっ／＼ひざっ／＼／」

「膝…？あー」

そう言えばここって保健室で僕千冬姉さんに膝枕されてたんだった。

「……篠ノ之、鍵を閉めろ」

「はっ、はい」

別に危険物を扱う訳ではないのに幕は危険物取扱者顔負けの慎重且つ繊細な動きで鍵を閉める

僕は起き上がり携帯端末を取り出す
その時千冬姉さんが残念そうな表情をしたのは見なかったことにしておこう

「気分転換を兼ねてあの追加武装の設定でもしようかな？」

「追加武装…？」

「また出鱈目なアレを……」

箒は興味深そうに、千冬姉さんはため息を吐きつつ『またか』みたいな表情をしていた

「そ…今の段階で可能なのはブルーティアーズの強化機体でもまだ実戦に投入できるかと聞かれたら無理だけどね」

それにあの草食動物が性能に追いつかないと意味がないしね

「ところで一夏、そのベルフェゴールとやらはなんだ？」

あれ？箒ってこんなに目が良かったっけ？

結構字が小さいのに……いや、それより上手く誤魔化さないと……正直コレを知ったら使う前に死んでしまう

「紫雲の追加装備のコードネーム…主に剣主体の接近特化型だよ」

「ほお……」

「……………あ！」

今の今まで忘れてたけど僕の部屋（仮）に貼られている僕の写真どうしよう

「ところで織斑、あの写真はどつするのだ？」

丁度今考えてましたよ、でもどうしようかな…？
ゴミ袋3つで足りるかな

「一夏、あの写真とはなんだ？」

「僕につきまとう変態ストーカーが僕を盗撮した写真」

「ついでに言う弱冠14才でここを卒業した『残念な天才』だ」

「……………大変そうだな、私も手伝うか？」

「それは有り難いね、でも授業にでないと……………ついでに他の労働力の確保も兼ねて」

やっぱり業者さん呼ぼうかな？

「……………すまない一夏帰っていいか？」

「ダメ」

「これは……相当だね」

「ねーねーおりむー写真幾つか貰ってもいいかな？」

みんな僕の予想通りの反応を示してくれたね
帰りたくなる、ドン引き、写真をお持ち帰り

まあ気持ちはわかる、一度教職員＋僕で1日かけてやってみただけ
4分の1ぐらいしか片づかなかったし

「持って行きたい人は持って行っていいからね」

渋っていた女子がいきなりやる気になり写真を我先にと取り合いを
始める

「おおーこれはすごい」

「のほほんさんは良いの？他の2人は言っただけ」

女子たちにやる気の火を付けた本人は見ていだけで写真を取ろう
としない

「今行ったら疲れるし、互いに潰し合いをしてるときに取った方が
楽だからね」

この子は見かけによらずなかなか知将のようだね見かけによらず、
大事な事だから二回言ったよ

「一夏、気になっていたのだがのほほんさんとはどう言った関係だ
…？随分と中良さそうだが？」

「初日は千冬姉さんの所で泊まってね、夜中トイレに行った時偶然
会って、名前が言いづらいからのほほんさんで僕のことはおりむー
なわけ」

半分ねぼけてたんだけど……それは言わない方がいいね
それよりもこの機体の『クセ』を覚えないとね……柄じゃないけど
秘密特訓を試してみようかな

暗い部屋で一人の少女が虚ろな瞳でパソコンのモニターを見て指を

舐めていた

「ああ…一夏、私の一夏……凜々しくて優しくて強い私のお兄ちゃん」

モニターに映っていたのは笑顔を浮かべている一夏、泣きそうな表情をした一夏

狂気な笑みを浮かべる一夏

怒っている一夏、様々な表情をしている一夏の写真がモニターに表示されていた

「ケホツ……『クー』IS学園に転入手続きを私とあの子の分をお願いね」

《了解しました。お嬢様》

少女がフラフラ歩きながらドアに向かう

「行きましょう『ファントムランサー』一夏を殺そうとする愚かな組織を駆逐するために」

少女が部屋から出ると明かりが灯る

部屋には巨大なコンピューターがモニターにはISの設計図が表示

されそのモニターの前にはひし形の結晶が浮かび、部屋中には一夏の下着やシャツ、使用したストローや箸が散乱していた。

彼女は一夏が認めた天才の1人で残念な天才と言われ弱冠14才でIS学園を卒業した少女『平泉 緋也』だった。

クラス代表決定戦その2（後書き）

大地震の被災者の皆さん

大変な状況ですが私個人では無力で何もできませんが少しの募金と家族との再開と無事に物資が届くことを祈らせていただきます

クラス代表決定戦その3

あれから数日経ちとうとう迎えた決戦当日

《全システムオールグリーン、ヌーヴォラシステム使用可能、L E

S 使用可能

スラスタ―全機稼働可能

エネルギー50%に設定

武装使用可能

トンファー

自立機動兵器『球針』

腕部拘束用兵器『ロール』》

「……オールクリア、織斑 一夏『紫雲』行きます」

ピットのカタパルトから射出され、アリーナ・ステージへ一直線に飛んだ

「あら、逃げずに来ましたのね」

毎回思うけどこの草食動物の偉そうな態度どうにかならないの？

本当に殺しかねないんだけど

「君を咬み殺すと言った以上……咬み殺すまでさ」

《第一戦闘形態》

灰色の装甲が紫色に変わり、腰に装着されているトンファーを手に取り構える

草食動物のIS『ブルー・ティアーズ』はその名の通り青色の機体、外見は特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従え、どこかの王国騎士団のような気高さを感じさせる……まあ咬み殺すただけけどね

「最後のチャンスをおげますわ」

「……何？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくつてよ」

よほど僕に勝てる自信があるようだね

前回のVONGOLA戦で僕は不様な負け方をした後徹底的に身体

に機体の『クセ』を叩きつけ、全ての攻撃手段をこの身で受け止め特性を知った今の僕に……ね

「今頃英国で首相はもがき苦しんでいるんだろうね
まあ光栄に思いなよ、『紫雲』の最初の対ISの初陣の相手に出来ることをね」

「ッ！！そうですか……ならお別れですわね！」

《警告！敵ISから射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。》

ISの警告から数秒後に『スターライトmk?』から青いレーザーが僕に放たれる

「関係ないよ」

《Nuvola System Time Limit 0:05》

ヌーヴォラシステムを発動し、トンファーでレーザーを吸収する

《エネルギー25%吸収変換率100%》

これで僕のシールドエネルギーは50から75になった。
変換率100%の限り相手のエネルギーを吸収し続けて変換する

「そんな!？」

《Time Over》

「ヌーヴォラシステムタイム10」

《Novola System Time Limit 0:10》

スラスターにエネルギーを送り、圧縮させた後爆発させるように解放して加速させる

この技は『イグニッション・ブースト瞬時加速』の原理の安全さと危険さを限界まで上げて安定させる

この『紫雲』の特性はボンゴレ10代目『沢田綱吉』の技を応用されている部分が多い

全てわかる訳ではないけどこの『瞬時加速』を応用して考えた『イグニッション・ムーヴ瞬時移動』は大空の炎とXバーナーがもとなったと思う

結構話しがそれだね、この『瞬時移動』は解放したエネルギーをヌーヴォラシステムで吸収したら無限に使える

「遅いよ」

「早いつ！きゃあああ！！」

《エネルギー103%吸収変換率100%
Time Over》

10秒の内移動に3秒、攻撃に2秒、吸収に5秒
僕も自分で疑うのもおかしいけど人間技？と疑う…けどこれは『クセ』を叩きつけたおかげで使えるようになった。

草食動物は僕のトンファの一撃で地面に衝突している

「これで二つ目の実験終了、ほら…早く攻撃してきなよ」

「あなたに言われなくても！！！！」

青いレーザーが何発も僕に向かい放たれる

勿論すべて吸収してシールドエネルギーに変換する

「じゃあ……僕の番だよ」

《Nuvola System Time Limit 1:00》

『瞬時移動』を使いブルー・ティアーズをトンファアで攻撃し続ける

「さあ…君の本気をだしなよ」

《エネルギー300%吸収変換率100%》

「くっ…!!あなたに言われなくてもだしますわよ!!」

彼女の周りに浮かぶ四つの自立機動兵器、フィン状のパーツに直接特殊（BT）レーザーの銃口が開いている。

ワオ……面白いね楽しませてもらうよ

「……いいね」

僕はわざと彼女から離れて自立機動兵器『ブルー・ティアーズ』の攻撃を避ける

「僕にも似たような兵器を持っていてね……行け『球針』」

腰に装着されていた通常サイズの自立機動兵器『球針』

ボディに四つの砲口が搭載されている

『球針』を彼女に向け、僕は『ブルー・ティアーズ』を破壊する

「はああ……すごいですねえ、織斑くんも…そのISも」

ピットでリアルタイムモニターを見ていた山田真耶がため息混じりにつぶやく。

確かに一夏はISはISに関しては初心者で最初は授業についていくのもやっとで知識は無いに等しい
だが一夏は感覚で覚えて闘っている
しかし千冬は対照的に悲しげな顔をする

「あの馬鹿者…また背負うつもりか」

「え？背負う…？」

「あの馬鹿は守ると決めた相手にはかなり優しい

だが放っていたら壊れてしまいそんな奴には厳しく接して挑発して馬鹿にして圧倒的に倒す

そして結果がどうでも守る

少なくともこの学園の生徒全員や教師全員を守ろうとする」

「さすがご姉弟ですねー。そんなことまでわかるなんて」

千冬は照れた表情をして視線をそらす

「姉だからな…見ていると不安になる
その傷だらけの身体にまた傷をつけるつもりなのか」

「あー、照れてるんですかー？照れてるんですねー？」

「……………」

ぎりりりりっ…といい感じにヘッドロックが炸裂した。

「いたたたたたたっっ！！」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！わかりました！わかりましたから、離しーあう
っっっ！」

ぎゃあぎゃああと騒ぐ副担任の真耶を気にもかけず、箒は不安そうに

モニターを見つめている

「一夏……………」

初めて会った時は無愛想な少年

しかし自分が誘拐されたとき、たった一人で大人達を半殺しにして
返り血を拭いながら不器用そうに笑いながら手をひいて歩いてくれ
た。

箒にとって初恋の相手で夢見る乙女風に言つと『白馬に乗った王子
様』で、箒は『血染めの騎士』と間違つた認証をしたまま生きてい
た。

（無理をしないでくれ）

箒は僅かに唇を噛んだ瞬間、試合は大きく動いた。

「どうだい……？僕の『球針』は」

「ハア…ハア…………どうしてあなたの自立機動兵器は「脳波さ」脳波
？」

「そうだよ、君のブルー・ティアーズのように単に指示をだすだけじゃなくて、脳波で常に指示をだしている
攻撃、防御、動作にその他諸々…ね」

「そんな兵器」あるんだよ」ッ！！」

「悔しいかい？見下していた男にこうもやられると思わなかっただろっね」

僕はトンファ―を構え直し彼女を見据える

「セシリア・オルコット、君はいずれ壊れる可能性がある、だから今君を咬み殺す、誰にも壊されないように」

《N u v o l a S y s t e m T i m e L i m i t 》

装甲の色が変化しセシリアの背後に周りトンファ―で殴り飛ばす

「早く終わらせよう」

腕部拘束用兵器『ロール』をセシリアの腕に向けて放つ

カシャン、と手錠のなる音があったと同時に体中を拘束する

「なっ！？これは」

「腕部拘束用兵器『ロール』」

本来は腕を拘束する兵器だけど裏技で全身を拘束することができる
ようになってね

まあ今の君を守るには丁度いいよ」

残りエネルギーは確実に50を下回る
なら……今やるしかない

「おやすみ…セシリア・オルコット、今度は君を守るよ」

僕は『ロール』を引き寄せてセシリアを『ロール』ごと殴り飛ばした

〔試合終了。勝者――織斑 一夏〕

決着を告げるブザーが鳴り響いた瞬間、僕の目と鼻の先には黒いビ
ームが迫っていた。

ドオオオオオオン……

黒い戦慄（ブラックシヴァー）（前書き）

来てくれる人、読んでくれる人、感想を書いてくれる人ありがとうございます

今回も短くてすみません

今回はセシリアメイン、もしくはほぼ原作通りで行きます

ところでorzって何て読んだら良いんですか？普通にオールゼットで良いんですか？

黒い戦慄（ブラックシヴァー）

僕が一瞬油断をしたときを狙うなんてね
一応反応を確認してたけど……

「君…僕と殺し合いをしたいの？」

黒いシャープなフォルム、それに両肩のキャノンは紫雲に搭載されるはずの『ブレイヴ・nA』
ライフルは……知らないタイプ
背中の自立機動兵器は『球針』と同じタイプ
まさか僕と同タイプの機体…？

「凄いなエ…おにイチちゃん」

この喋り方にお兄ちゃん……1人心当たりがある

「君は平泉 緋也かい？」

「アハハハッ！違うよオ！！」

声からして少女のISのキャノンの砲口が僕に向く

「…………何故撃たないの？」

中国の『甲龍』と同じタイプかな…？
仕方ない、僕も一度だけ使える試作銃を使おうか

「アハ」

「ッ！？」

突然全身に電撃が巡るような痛みに襲われる
体が…動かない、それどころかISがおかしくなった。

「どオ？エネルギージャックの味は」

「エネルギー…………ジャック？」

「そ、ウイルスをISに送り制御を狂わせ人体を硬直させる
そして数秒後ISを乗っ取るシステム」

なるほど…………それは良いことを聞いた。

それなら対抗策がある、ただ後で千冬姉さんに怒られるだろうな

「LES発動」

《Life Energy System『LES』起動開始》

「ッ…！アアアアアアア…！」

これは…痛いね、これならエネルギージャックの方がまだましな痛みだ。

それに…早く終わらせないと僕が死ぬ

《MKL3 R?『ブリューナク』展開》

「凄い…凄いや…おにイちゃああん…！」

僕は大型のライフルMKL3 R?『ブリューナク』を構える

「ターゲット敵ISに設定、フルキラーモードOFF、弾数1、サ
ーチモードON」

僕の頭に直接情報が入り、アリーナの環境のデータが僕を通して『ブリューナク』に転送される

《敵ISの移動パターンはHHタイプ

距離は500〜1200を移動中

湿度による弾の軌道修正なし

風向きによる弾の軌道修正なし》

「特殊スコープ展開」

《スコープ展開》

僕のIS『紫雲』のブラックボックスにあったデータに特殊モードが幾つかあった

1つはモード とモード 時にのみ使用可能武器

それと偶然見つけた射撃武器を持たないのに搭載されていた特殊スコープとスナイパーフォーム

もしかしてと思ってもっと調べたら1つだけ射撃武器があった

それがブリューナク

マシンガンにショットガンにミサイルランチャー、レーザー兵器を1つで賄える特殊な射撃武器

まだ完成してはいないけどかなり強力な射撃武器だ

「やアアアアアア！！！！！！！」

《敵IS接近型の武器展開を確認》

「狙い撃つ!!」

《Shot》

ブリューナクから放たれた1発の弾丸が黒いISを撃ち抜く

「ヌーヴォラシステム発動!!」

《Nuvola System Time Limit 1:00》

そしてブラックボックスにあった特殊システムの1つ

トンファー以外の武装にヌーヴォラシステムを使用できる拡張システム『リホーム』

まだまだあるけど……今はそれだけでいい

「咬み殺す」

「くッ……!!」

トンファーにエネルギーを纏わせ敵ISに数発殴りつける

「さすがおにイちゃん……でもまだ!」

《敵IS沈黙》

「……へ?」

「残念でした…君の機体は戦闘不能
つまり君の負け」

「あの小さいのがあの残念な天才の妹?」

「うん、今さっき^{プロト}緋也に電話して聞いた。
^{ブラックシヴァー}P紫雲の派生機体の『黒い戦慄』のテストをしたかったらしいよ」

姉妹揃ってなかなか危険な子だ。これじゃあ千冬姉さんが悪酔いしてしまうね

姉妹揃ってこの学園に来るなんて……緋也は来なくていいよね、もう卒業したんだし

「P紫雲……つまり前から紫雲はあつたのか？」

「うん、武装は適当に各国家から『戴いて』ね」

「お前の『戴いく』は『盗む』だろ」

さすが千冬姉さんだ。僕のことを良くご存知で

「それといつまでその性格でいるつもりだ？」

……それまで知られてるとは

「お……れは、しっ……師匠の……せい……かくがつつて、ああじゃない……と」

「なるほど……つまり演技か」

ちえ……つまらないな、演技でもないけど合ってることは合ってるし

「俺は幼い頃純粹だからね、だからうつったんじゃないの？」

師匠に頼んで教えてもらってね…2つの性格の上手な分け方を」

まあ師匠の性格ってひねくれて孤高の狼気取りの厨二病みただけ
どこういう嫌われ役とかに思いのほか役にたつから有り難いよ

「まあいい、さつきから気になっていたのだが…何故白い薔薇が赤
い薔薇になっているのだ？確か私にセシリア・オルコットの見舞い
として白い薔薇を注文させたはずだろ
なのに」

「花屋が車にひかれて血で真っ赤に「そんなものを見舞いの品にする
な馬鹿者」最後まで聞いてよ」

「なんだ…？」

「僕は天才的な馬鹿だ」

………すみません師匠、僕はアナタの真似をしてボケたらすべりまし
た。

実の姉からこんな哀れんだ視線を向けられたのは初めてです

「…コホン！…とりあえず織斑　一夏、見舞いに行った後、平泉
緋和ひよりの世話をすることを命ずる」

「……うーす」

「はいと返事をしる馬鹿者」

「僕はてんさ」それはもういいから」…はい」

部屋からでて思うけど久々に師匠の性格以外を千冬姉さんに見せた
気がする

でもあの性格じゃないと僕は潰れてしまう

ならとことん利用させてもらうよ、雲雀　恭也…僕の師匠

「僕が大事な人を傷つけた奴をグチャグチャに咬み殺す為に……ね」

先にセシリアに謝らないと……あそこまで馬鹿にした挙げ句気絶ま
でさせたけど……許してもらえるかな？

嗚呼…やっぱり俺には無理だな『残忍で冷酷』ぶるのは
何時までも甘ちゃんな俺は俺らしく咬み殺すまでだ

「C・イシエール、君は絶対僕の手で咬み殺す！」

僕と瓜二つの忌まわしいあの男……僕からすべてを奪った『織斑
一夏』を絶対に許さない

黒い戦慄（ブラックシヴァー）（後書き）

はい、今回の話して読んだ人の大半は『は？』だと思います

『いきなり追加設定してんじゃねえよ』とか『テーマまたか』とか
思われてもそれは当然としか言いようがありません

まず原作を読んで悩んだのが今の所第一携帯の一夏と互角に闘える
のが更織楯無しかないことが判明

実は設定ノート（と言う名の落書き帳）には第3段階までありしま
った！と思ったときは時すでに遅し『設定』を投稿しており、細か
いことは後に更新しておきます

今回の事を軽く説明すると

一夏は平行世界の一夏の記憶をもっていて、平行世界の一夏は別の
一夏に殺されている

殺された一夏は原作の一夏と違い世界を渡ることができる厨二設定

一夏の幼い頃は純粹ってのは殺された一夏が悪意を取り払い本当に
純粹でイメージはでい・えっち・えいの主人公を見てもらえればす
ぐにわかります

千冬がブラコンなのはそれが理由です

時間軸で言うと

一夏と箒の初対面時はすでに雲雀と会っていて危険時に力を解放する…と力を貸したら性格が若干雲雀よりになって誘拐後に純粹無垢な一夏に戻る

その後鈴と会ったときも純粹無垢、だけど中学に入ると同時に雲雀のもとで修行して今の一夏が完成
一応ラウラとは会ってます

長くなってすいませんが最後に読者の意見がほしいので聞いてください

実は話が進むつれに一夏が所属する組織が出てきます
それでできれば他のラノベとコラボをしたいのです

作品は2つで

作品のヒントその1は 一方通行役 猫 D

その2は 雲雀役 生徒会 F

戦いモノではなくわりと平和な作品です

アリかナシかで聞きたいと思います

感想に書いてもらえれば嬉しいですが書く価値があるとは思えないのでメッセージでよろしければお願いします

次回から長く書きたいと思います

過去編その1『織斑千冬の驚愕』（前書き）

あー、お久しぶりですアニメ版もすもすにイラスト ときたフィルムです
福島県から来た従妹にラノベを貸しているので本編が書けなくなり、
質も普段の倍ダウンします

なので当分過去編や番外編をやります

今回は一夏が何をしても驚かない理由が少しわかります
シヨター夏は当分続きます

過去編その1『織斑千冬の驚愕』

私、織斑千冬はおかしくなってしまったのだろうか

最近私の弟、織斑一夏が可愛くて可愛くて仕方がない、一応友人である束にも話してみたが危険な女だと言うことはわかった。よく見ればアイツが一夏を見るときの目が野生の獣が獲物を捉えた目だったからだ

「はあ……」

「どーしたの？ちいねえ」

ああああ！！可愛い！止めて、可愛らしく首を傾げるなあああ！！！！

「な、何でもない…それより一夏、学校はどうだ？」

「たのしーよ」

私は一夏の純粹無垢な笑みを見ると安心する、一夏はたまに静かになり口を開かなくなるときがある、それと急に大人びることだ。まだ幼いののに急に血なまぐさいことを知った大人みたいになる
だから純粹無垢な一夏を見ると、まだまだ幼い…とわかる

「ぶーん…ぐしゃあ」

どうやら一夏は絵を書いているらしい、ぶーんと言うのは飛行機やロボットが飛んでいる音だろう、だが…ぐしゃあとは一体？

「できたー」

「ほう…見せてくれ」

「いいよー」

はい…と可愛らしく紙を渡す一夏を見て頬が緩みそうになるが、なんとか緩まずに、絵を見た

「なっ…!?!」

「？」

まだ幼いから絵がわかりづらい部分もあるけどわかる、何故なら私はこれに似た物を見せてもらっていた。
束がまだ造るのは無理だなーと言って私に見せたISとやらの『白騎士』にそっくりだった。

もちろん一夏に見せてないし束も誰にも見せていない

「黒い…?」

「それは黒騎士、本来僕が使っ予定だったISだよ、千冬姉」

私はいつもと違う喋り方になった一夏を見る…見た目は普通の一夏だが…いや、目がおかしい

「千冬姉の思っている通りで合ってるよ…とりあえず初めましてかな?この時代の千冬姉」

「この時代…?何をバカなッ!？」

おかしいと思ったその目はあまりにもおかしかった。
つばらな瞳の色が逆になっている、周りが黒で中が白色になっていた

「あまり時間がないから手短に話すと俺はパラレルワールドの織斑一夏…と言ってもすでに死んでいるけど

僕はみんなを死なせてしまい黒騎士を使えなくなり殺されたんだ…
…もう1つのパラレルワールドの俺に」

「待て、意味がわからん」

「待たないよ、今のところ黒騎士と零式に耐えられる織斑　一夏は俺が確認した4兆2739億1503万4651個のパラレルワールドのなかでこの時代の織斑　一夏だけ、千冬姉には悪いけど俺の能力でこの時代の俺を鍛えさせてもらう」

よ、4兆2739億1503万4651個のパラレルワールド……
かなりの数なのに選ばれたのがこの時代の一夏……？

「黒騎士に求められる純粋な闘志と零式に求められる純粋な優しさを兼ね備えるのはこの時代の俺だけ、この時代の俺は絶対に最強にしないといけない」

「少し待て……せめて黒騎士と零式に教えてくれ」

「黒騎士は千冬姉の知る白騎士の後継機、零式は……詳しくは言えないけど千冬姉の新たな機体になる予定だった機体」

「何故詳しく言えないんだ？」

「俺が未来をあまり言うところの時代が減びかねない、俺は俺でやらないといけないことがあるから……ああ、もう行かないと」

わからないことだらけだが……私の弟は大変なのはわかった。私には何もできないのか……？
いや、1つだけできることがある

「一夏……正直わからないことだらけだが無茶だけはするなよ、いつでも来い」

激励しかできない……無力な姉をゆるしてくれ一夏

「そんなことないよ千冬姉、ありがとう……行ってきます」

「ああ……行つてこい、愚弟」

今の私は泣いてるのだろうか……どうして素直になれない……!!……どうして行くなと言えないのだ……織斑 千冬……!!

「ちいねえ？泣いてるの？」

いつの間にかパラレルワールドから来た一夏は今の一夏から消えて、一夏はもとに戻っていた

「誰か泣くか…弟が頑張っているのに泣いてられるか」

「へんなちいねえ…おとーとはボクだけなのに」

弟は僕だけなのに…か、今の私は4兆2739億1503万465
1人と弟の命の鍵を握っている気分なんだがな

「一夏、その絵を束に見せていいか？」

「たばねえに！？いいよ！！」

「いい子で待っているよ」

「うん！」

私は一夏の頭を撫で、一夏の絵を持って束のもとに向かう、アイツ
なら興味を持つはずだ
もしかしたら何かの役にたつかもしれない

「ちいねえのおとーとはボクだけ……か、ちいねえのことだからまた無茶をするだろうからボクが頑張らないと」

『そうだな……』

こんどはボクがまもる、ほつきもせしりあもりんもしゃるもらうつらも……ぜーいんまもる……！

過去編その1『織斑千冬の驚愕』（後書き）

すウウウウウイイイイイイアアアアアセエエエエンンン
ンン 一方通行風に

はい短い・駄文・つまらないのMDTです

お願いですから辛口だけはやめてください!!!もう俺のSPは
よ!!!……ああSPってのはストレスポイントであって、スペシャ
ルポイントじゃないですよ?

従兄妹達とともに会話が出来たと思えば身内からの八つ当たりで
この間 キレちゃった

さてさて次回は…未定です

本当スイマセンでした!!!次回もよろしければみてください!!!

この小説の一夏の関係と行動その1（前書き）

もっ少しで小説が帰ってくるので本編再開できそうです

この小説の一夏の関係と行動その1

篠ノ之 篇

一夏のファースト幼なじみにして一夏に変な二つ名をつけた本人原作ほど束を嫌っていないが一夏に対する行動を見て引いてる唯一、一夏の弱点を知っている女性、一夏を異性と見て好意をよせているが兄として見ていることが多い、因みに転校した篇をイジメた人間は一夏に半殺しにあっている

好感度 5 (1→5)

セシリア オルコット

一夏専用の完成したISで最初にボコボコにされた女性、実は別の機体でボコボコにしていたがセシリアのプライドの为一夏が初めてと言った

セシリアは忘れているが一夏とは幼い頃に会っている、因みにセシリアに残された遺産を狙った大人達は後に一夏に半殺しにあった後経営を行っている者達に圧力をかけて潰している

好感度 5

鳳 鈴音

一夏のセカンド幼なじみ、純粹一夏から雲雀一夏に変わった所を見た悲惨なヒロイン、しかし一番一夏の世話になっている、和食を一夏から教えてもらう

ある意味優遇されているが一夏からは猫扱いされることがある、一

夏のある部分がトラウマになっている

因みに鈴の転校の後押ししたのが一夏であり軍の上層部を所持するIS3機と一夏専属の特殊部隊と一夏本人が45マグナムを向けて脅迫した。

好感度 5

シャルロット デュノア

一夏と一番面識ないが何回か会ったことがある

一夏はシャルロットがいないときにデュノア社の社長にある理由でキレて大怪我をさせが取り押さえようとしたSP、警察を半殺し、フランスの軍やISを半壊滅状態にして経済的に崩壊しかけ被害額は億を軽く超えた。

因みに社長は全治1年の怪我を負ったが一夏は知り合いの医者に治し1週間で強制的に働けるようにさせた。

フランスは一夏の逆鱗に一度触れている為もう一度逆鱗に触れたら文字通りの崩壊する

勿論一夏はシャルロットが女なのを知っている

好感度 不明

ラウラ ボーデヴィツヒ

最初に一夏にボロ負けしたのがラウラで一夏対黒兎隊との模擬戦で一夏はバイク1台とペイント弾のマグナム45を1丁で圧倒した。ラウラはそれ以来対抗心を抱き勝負を仕掛けるが全敗、ラウラを『兵士』としか見てない軍内部を徹底的に潰しドイツは軍隊の7割を一夏に向けるが完成度60%のISにより僅か1分で殲滅させられる

一夏は姉がドイツに行ったときに飛行機に潜り込みドイツ軍に潜り込んだついでに軍のデータベースをハックしリアルタイムで情報が入りそのことをドイツ軍はわからない、VTシステムを作った研究所は原作と違い研究員は全員重傷、施設は全壊
ラウラは対抗心を抱いているが一夏に好意を持っており一夏がドイツにいるときは一緒に寝ていた。黒兎隊も一夏のことを慕っている
因みに唯一国の中で一夏に本気で攻められた国

好感度 5

最後に

この小説の一夏は原作の一夏を遥かに超え雲雀以上に過激でかなり危険人物、しかし怒らせれば国を崩壊させることなど簡単な為、国は一夏に手をだせない、しかし一夏は何も余計なことをしなければ何もしない

未完成のIS設定

名前 黒天

武装 ?

特殊武装 ?

製作者 篠ノ乃 束

概要

名前と制作者以外が公表されていないISで各国がわかっているのが消える上レーダーに映らなくセンサーすら反応しない為一瞬で敵を殲滅させることが可能：

その姿を見た人間は口を揃えて『悪魔』と答える

この小説の一夏の関係と行動その1（後書き）

スイマセン

待たせたうえにこれでスイマセン

番外編その1『一夏の起動実験』（前書き）

お久しぶりです、今回の話しは自分でもよくわかりません
時系列はセシリア戦以降鈴登場前です

ユニーク10000人突破&ユニーク80000突破、皆さんあり
がとうございます!!

番外編その1『一夏の起動実験』

「普通の授業がヒマだからな…そうだな織斑、折角だお前の始めてISを起動した時の話しをしたらどうだ？」

……おかしい、僕の姉はブラコンなあたりからおかしいが…今日は群を抜いておかしい、あの鬼教師の千冬姉さんがつまらないとか言うのは絶対おかしい例えるなら大人しい束姉さんか満面の笑顔で商店街を全力疾走する僕ぐらいおかしい、いや…実際にやってないけどさ、ほら姉さん…固まってるよ、山田副担任なんかショックで石化にちかいことになってるし

「はいはい！！その時の話しならこの天才の束ちゃんにお任せだよー」

ズンガラガツシャーン、そんなコメディアンな音をたてながら僕は椅子から転げ落ちた。

おかしい、本当におかしい…冷静&クールに定評がある僕の定評がこのままでは剥がれかねない

「……………一応聞いておくが…束、何故ここにいる」

僕は制服の埃を払い、椅子を直して座って咳払いをする

「その姉さんが言うように何故世界中が探している束姉さんもと
い束博士がここにいるの？」

「えー？何か最近いーくん構ってくれないもん、紫雲につけておい
た盗聴器で都合よく登場したくなったからー」

アナタはそんな事の為に紫雲の容量を……アンリマユのことだから
束姉さんに渡してるから不可能ではないけど、何何かの武器かと思
った武装の容量の3割をしめていたのがまさか盗聴器だったなんて

「もしかして束って…あの篠ノ乃 束ですか!？」

生徒が一人騒げばみんなが騒ぐ、どれくらい経っただろうか、千冬
姉さんがキレそうなので机を殴り、恐怖で黙らせた。

「で？天才の束ちゃんにお任せとか言っていたが、何を話すつもり
だ？」

「えーとね、いーくんの最初の専用機になる予定だった『天牙』『
ブルー・クラウド』『龍王』の3機がいーくんの技術に追いつけな
くて壊れちゃうやつと『黒天』と水中用『サダールスト』に高速戦
闘用『ライトニング・スター』…後はベル「それは駄目だ!!」い

「くん？」

クラスがひんやりと静まる、僕が叫んだのと束姉さんを睨んでるか
らだろう、でも『ベルフェゴール』は駄目だ。まだアレは早すぎる、
あんな光景…見せられるモノか

「それに束姉さん、あれは……ISなんて呼ぶほど生易しくない、
アレはただの人殺しの兵器だ」

（束…一夏に何があった？）

（……それはちーちゃんでも教えられないよ）

あの光景は今でも覚えている、IS専用の剣で人を斬った感触、あ
の『砲撃』で人を数百と葬った光、あの武装で人を握り潰した感覚、
どれも鮮明に覚えている
今とは違う最初のベルフェゴールは……

「一夏！！」

「ほ、第」

僕は第に肩を叩かれ、気がついた。周りの生徒が怖がっていることに

「んー、じゃあ見よつか」

机にモニターが現れ映像が流れる

「因みにいろんな視点で見れるからね」

『天牙、初期設定終了、戦闘に移る』

『じゃーあ、あの戦闘機落としてね』

天牙を装備した一夏はレーダーに映った反応に近づいて、腰にある
プラズマソードを右手に持ち、斬りつけ、左手にマシンガンを持ち
戦闘機を撃ち抜く、攻撃から逃れた戦闘機は一夏に向けて機関銃を
撃ち、一夏は両手にプラズマソードを構えて弾を弾き続ける

『……ん？東姉さん、左手の反応がおかしいよ』

『えー？ちょっと待って……あ、本当だ。』

するとパキンという音がなると左手がだらんと垂れて動かなくなつた。

『つとー！』

呆氣にとられた一夏に向けて残された戦闘機が一夏を襲う

『落ちろ』

一夏の右手に光の粒が集まり追加武装のイタリア製のショットガン『アルセラ改』を構えて数機の戦闘機を一撃で撃ち抜いた。

『おー！流石いーくん、あの状況であんな動きできるんだ』

『まあ…束姉さんの期待に応えないとね、それより他の機体もするんでしょ？今度はちゃんとしたのをしてよね』

『りょーかいりょーかい、この束ちゃんにお任せー！！（今の…ほぼ第四世代の機体だったんだけどね）』

そしてブルー・クラウドはB-Tタイプの第四世代型だが自立機動兵器が一夏の指示が自立機動兵器に耐えられず自爆、甲龍の第四世代型である龍王も一夏の空戦に耐えられず中破した。

〽 月×日 プロト第五世代型IS起動実験〽

黒天は国家秘密に関わるので映像データを破棄しました。

『今度は水中用か…』

『どうどう？ソレの乗り心地は』

一夏は全身装甲型のIS、水中用IS『サダルスード』を纏い水中には青色の光を放つコンテナがあった。

『なかなかいい感じだよ、少し不安要素があるけどね』

手を握ったり開いたりして感触を確かめて水中に入る

『相手のコンテナも攻撃してくるからうまくいって破壊してねー』

『簡単に言ってくれるね』

フルフェイスのモニターに脚部の部分が点滅する

『そう言うことが…』

脚部の装甲が少し展開しミサイルが放たれ、コンテナを二つ破壊する

『次』

肩に付いていたパックが展開し、魚雷が放たれ、歪な動きをしながら的確にコンテナを破壊する

『お見事！ーじゃーあ、最後にこのポイントの基地を破壊してねー』

『ねえ、それ……ああ、通信切られた。仕方ない…エネルギーの残量と武装のリストを展開して』

《エネルギー残量600%展開可能武装は『肩部搭載魚雷残弾数8』
『スーパークャーピング魚雷残弾数10』『腕部アンカー×2』
『背部大型キャノン砲【アルテミス】残弾数20』『背部搭載マイク

ロミサイル残弾数500』『脚部搭載ミサイル残弾数10』
特殊武装として『肩部搭載ジャミングミサイル残弾数20』『特殊
ステルス迷彩、使用可能時間1分』》

フルフェスのバイザーが赤色に光り指定されたポイントに向かう

指定されたポイントにあった海沿いの施設は違法研究施設で国家的
に介入できない施設だった。

『目標ポイント到達、敵勢力…排除開始』

《アルテミス展開》

サダルスードの背中に巨大なキャノン砲が展開され、リロードし薬
莢が排出され、バイザーにリーダーが映る

『発射』

《Shot》

ドオンと音を鳴らしアルテミスから放たれた弾が研究施設を襲う

『よし、アンカー射出、特殊ステルス迷彩も使用、ミサイルを全弾とジャミングミサイルをありったけ放つ』

《了解》

特殊ステルス迷彩で視認不可能となったアンカーが地面に刺さり、キャノン砲でパニックになった。施設にミサイルが降り注ぎ、ジャミングにより衛星でさえデーターが得られなくなり、通信が出来なくなつた。

海から地上に上がった一夏は施設にマイクロミサイルを放ち続ける

サタルスード

《ドイツ空軍とISの反応を確認、10時の方向》

『ふうん…なら迷彩を使って引くよ、ジャミングで当分これ以外のレーダー使い物にならないだろうし』

月 日 高速戦闘用型 ライトニング・スターの起動実験

「ふーん、海の次は空…ね」

『うん！！ほら、男の子って空を飛びたがるものだし』

「でもこれ音速ぐらいの速さになるでしょ？」

『うん』

「もういい、ライトニング・スター」

《All Light》

軽装甲ながら固い装甲でシャープなフォルムで両脚に四つのスラスタ―、腰に二つのスラスタ―、肩に二つのスラスタ―、背中に六つのスラスタ―でメイン武装はナイフとサブマシンガン、追加武装でミサイルポットを装備し、飛び立った……

「以上」

僕の一言でクラスからブーイングが向けられる、実際黒天は機密事項だしライトニング・スターの初起動時はスピードに耐えられず何

度が意識を失っているし…あれを見たらトラウマになりかねない

「もっと見たい!!」

「ねーねー!」

「一夏さん!!」

……イラッ

「そんなに見たいなら見せてあげるよ……」

黒天を展開するがクラス全員には見えていない、そりゃあアレを使
ってるからね

「一夏くん!!見せてないよ!!」

「……展開」

教室の鏡を見ると僕の姿が足からスーと消え、クラスメートは全員
驚いていた。

「ほう…これが一夏の言ってたシステムか」

「うん、ドイツ軍を壊滅にまで追い込んだ黒い天の鎧、黒天のミラ
ージュフィールド」

どうやら姉二人は満足したらしい、ならもういいかな…？

「解除」

ミラージュフィールドを解いてISを展開した状態で教壇に立つと
何人か悲鳴をあげる
見た目怖いからね、正直僕も怖い

「わかった？因みにコレ国家機密事項だから口外したら大変だから
ね」

クラス全員が青ざめる、はは…ザマア見ろ………だけど、本当に国
家が介入しないと限らないから警戒をしておかないとね

「じゃーねー」

気がつけば束姉さんは窓から飛び降り、ニンジン型のロケットが飛んでいった。

あの人…フリーダムだね

過去編その2『BELPHEGOR』（前書き）

すいません、最近いろいろあったフィルムです
なかなか本編がすすまないので過去編をやります
いつめ来てくださる皆様ありがとうございます

過去編その2『BELPHEGOR』

「ベルフェゴール……これがあの禁断の機体」

「そうだよー」

僕が格納庫に鎮座しているIS『ベルフェゴール』を見ていると頭に犬耳、服は赤い服だから一人赤ずきんの束姉さんがドアから入ってきた。

「みんな勝手だよなー、こんな機体を世界で造って誰も使えないからっていいーくんに押しつけるなんて」

「そうでもないよ……実は楽しみだったりするから」

僕はベルフェゴールを待機モードにして、すぐに展開してベルフェゴールを纏った

そう、この時の僕はまさかあんな事になるなんて思わなかった。

「あれが例の国際テロ組織のアジトってわけなんだね」

『うん、政府からは生かしてもいいし殺してもいいだってさ』

「ふうん……まあいいや、じゃあ始めるよ」

ベルフェゴールの肩と胸の装甲が開き砲身が展開される
その瞬間、一夏に激痛がはしった

「ぐうつ……！な……なん」

《ベルフェゴール戦闘モード

キルモード

アヴァロン出力10%

敵殲滅行動開始》

「は……？」

一夏が啞然とした途端、200M先にあったテロリストの基地の半分が消し飛んだ。否、蒸発した。ほんの一瞬で数百の命はこの世から消えた

「くつ……！！操作が……！」

『いーくん!?!どづ……』

「通信まで……これはヤバイ、まさか制御すらできな」

《敵の生存を確認、殲滅開始》

スラスターが起動し、基地に突撃する
テロリスト達は突然襲撃されたことに浮き足立って、パニックに陥っていた。

「ガ……ガガッ」

《操縦者の意識を掌握、プロテクト解除》

「アハハハハ……!! イイね最高だ……やっと娑婆にでれたぜ」

ベルフェゴールの意識に一夏は体に乗っ取られていた。その隙にテロリスト達は武装し、（ベルフェゴール）一夏（以下B一夏）を囲っていた。

「ンだア…ハハッそうか、そんなに死にてえならくたばりやがれ」

《グロムリン》

右手に大剣が出現し、テロリスト達を斬り殺す、しかもその斬撃が周りのテロリスト達も斬り殺し、建物が抉れ、腕や脚が切れてもまだ生きてたテロリストを肩に搭載していたクローで頭を握る

「ククク…どうだい、一方的に圧倒的な強さに蹂躪される気持ちは」

「や…やめろ!!やめてくれ」

バイザー越しにB一夏は残酷で冷たい笑みを浮かべクローに力を加える

「ぐああああああああああああああああ!!!!!!!!」

「!!!!!!!!!!!!!!」

メキツと音が鳴ると腕がダラリと垂れ、B一夏はクローからテロリストを離し、地面に投げ捨てた。

グシャツと地面に落ちた人だったモノは両脚両腕が無く、首から上からが碎けて最早原型を留めていなかった

「キヤハハハハハハハハハハ！！！！！！！！！！」

腕から視認するのが難しいワイヤーブレードが射出され周りの物や人を切り刻んでいく

「ハッハア！！」

腰に付いていた長剣「エクスカリバー」を構える

「死ねや！！」

360。横に回転して剣を振ると地面を抉りながら斬撃が飛ぶ

《3時方向に輸送船を確認、離陸準備をしています、恐らくこの基地にいた残りの人員かと》

「離陸した瞬間狙い撃つてやんぜ」

クローを地面に刺し再び両肩と胸の装甲を展開してアヴァロンにエネルギーをチャージする

《エネルギー 30%》

「今だ……!!」

紫色のレーザーが離陸した輸送船を撃ち抜いた。
被弾した所から蒸発し、輸送船も蒸発して乗っていた全員がこの世から跡形もなく消えた

「ギャハハハハハハ……!!!!」

B一夏は笑いながら剣を振り、周りを切り刻む
すると上から緑色のレーザーが降り注ぐ

「チッ!!」

B一夏はそれを飛んで回避して、レーザーを放った相手を睨む

「おいおい、今の避けやがったぜ」

「しかたないよ、肉体は一夏なんだし」

睨んだ方向には緑色のISを装備し、ライフルを構えた少年と銀色

のISを装備した少年がいた。

「何で野郎がISに乗ってやがる」

B一夏の質問を無視して緑色のISの男はライフルをB一夏に向ける

「俺たちに勝つたら…教えてやらない」

《ブラスターカノン》

ライフルから放たれたレーザーをB一夏は避けるがレーザーが屈折してB一夏に直撃した。

「クッ」

「遅いよ」

銀色のISの男は2丁拳銃をB一夏に向けて

「しまっ」

ズガガガガと近距離で何発も撃ち、脚のミサイルを放つ

「くそ、クソっ!!」

何発か攻撃をくらった一夏は逃げようとするがミサイルに阻まれる

「誰だア!!」

B一夏が睨んだ先には橙色のISを纏った少年がミサイルポッドを構えていた。

「僕…？僕は空夏 一也、君を止める者だよ」

一也はミサイルポッドをしまい右手にライフル、左手にはマシンガンを持つ

「僕と……リヴァイヴ・セイレーンが君を…倒す!!」

「やれるもんならやってみるや!!」

橙色の閃光と銀色の閃光がぶつかり合う

「ねえ…ウラヌスのエネルギーがかなり減ってるよ」

「…俺のクロノスもだ」

互いに確認し合つと通信が入る

『失礼します、クイーンからクロノス及びウラヌスに撤退命令がでています』

緑色のIS…クロノスを装備した少年が舌打ちをしてライフルを降ろす

「しゃーねーか、エネルギーもヤバいしな」

「後は一也に任せましょう」

2人は戦線を離脱し、それを確認した一也はB一夏を蹴り、至近距離で腰に搭載していたミサイルポッドからミサイルを放つ

「グウウー!!」

B一夏は低出力で肩のアヴァロンを一也に向けて撃つが、簡単に避けられマシンガンをつけ、リヴァイヴ・セイレーンの脚に付いている隠しブレードの追撃をくらう

「俺の攻撃が当たらねえ!!」

《残りシールドエネルギー50%低下》

「はああ!!」

リヴァイヴ・セイレーンの両腕に搭載していたクローでベルフェゴールの両肩を掴み、アヴァロンの砲台を壊し、ベルフェゴールのクローが挟める

「一夏の体…返してもらおうよ」

「ツツツツ!!」

B一夏は逃げようとするが動けず静かにライフルの銃口を向けられる

「フルバースト」

腰のミサイルポッド、右手のライフル、左手のマシガン、それに両肩に搭載しているガトリング砲、太股部分に搭載している隠し腕にショットガン、ミサイルポッドを展開し胸の装甲が開き小型のガトリング砲を展開し、B一夏に向ける

「ショット」

月 日 とある国際テロ組織の基地殲滅時、IS操縦者がISに乗っ取られ暴走、数百人を虐殺する

秘密裏の組織から2機の擬似ISの戦闘

空夏 一也と名乗る男性IS操縦者は戦闘後オーロラに入り消える
乗っ取られた織斑 一夏の様態は怪我は軽少

ベルフェゴールは当分使用禁止の為コアを抜き取る

尚空夏 一也の使用していたIS『リヴァイヴ・セイレーン』は第4世代並みの戦闘力

形式番号からしてフランスのISであることが判明された。

レポート制作者 織斑 一夏

転校生はサード幼なじみその1（前書き）

かなり投稿が遅れました。

本当にすいません、しかも雑な仕上がりになってます。

こんな作品をまだ見てくれる方がいるならまだ頑張ります。

転校生はサード幼なじみその1

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦をしてもらう。織斑、オルコット、平泉妹。試しに飛んでみせる」

四月も下旬、遅咲きの桜の花びらがどこぞの会社のビルっ腹のセクハラ狸部長の頭のように散った頃。僕は何度も鬼教官である千冬姉さんの授業を若干真面目に聞いていた。

「おにーちゃん、『ひこうそうじゅう』って何？」

「……飛行時に行く操縦」

「わかったー」

あれでわかったんだ……凄いな

「早くしろ。熟練のIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ!!」

まあ…ちゃんとやらないと千冬姉さんが怒るし、緋和のリハビリもかねてるからそれなりにやらないとね

「集中しろ」

僕は瞳を閉じた。刹那、右手の指輪から全身に薄い膜が広がって鎧を纏う

時間にして0、1秒、瞳を開けると浮遊しているのを確認すると緋和もブラックシヴァーを展開していた。

あの時とは違い装備が全部変わっており、背後ブースターには獣の牙を長くしたような形状のビット『フアングビット』に肩には大型ライフル『ダイダロス』太腿部分にはビームピストル『レインゲン2』右手にはライフルの『クレアK1』左手にはシールドの『ハリウス』の射撃の武装ばかり、まあ緋也のESは接近の装備ばかり、でも僕の機体と相性がいいからフォーメーションはくみやすいそんなことを考えていたらセシリアもブルーティアーズも展開していた。

「織斑は流石と言ったところか：平泉妹は少し遅いが文句ないな、それにオルコットも代表候補生と言ったところだな」

「はい！」

「じゃあ飛べ」

僕と緋和は千冬姉さんの指示と同時に瞬時移動で急上昇して人が米粒ぐらいのサイズに見えるぐらいで静止する

「流石だね緋和、僕の瞬時移動をものにするなんて」

「おねーちゃんに教えてもらったの」

なるほどね…幻影の槍兵なら確かに瞬時移動を使えばISの絶対防御程度なら簡単に破れる
緋和に見せた時の標的が気になってしかたがないけど今は訓練中だし集中しないと

《織斑！どこまで飛んでいる》

「っと…いつもの癖だね、セシリアがいるポイントまで降下するよ」

《さっさとしろ馬鹿者、それとオルコットの所まで行ったら地上10cmまで急降下しろ、いいな？》

「はーい！ー！」

なんで緋和は機嫌悪い時の姉さんを怖がらないんだろう？
やっぱり子どもは不思議だね

「はあ…一夏さんならともかくあの子どもにも負けるなんて」

自分の不甲斐なさのため息を吐いて頭上を遥かに超えた所にいる2人を見て再びため息を吐く

自分は一夏と戦って負けた。弱いと思っていた男に負けた。だけど緋和は一夏を苦戦させて一夏の命懸けの切り札を使わせた。ただ自分はその背中にすら追いつけない、機体の性能、操縦者のテクニクと戦闘経験、すべてにおいて自分は劣っていた。

「おねーちゃん、どうしたの？」

「ひ、緋和さん！？いつのまにここに？」

「今さっき、もうおにーちゃんは降下したよ」

セシリアは緋和が指を指した方向を見ると心配そうな表情を浮かべながら空を見上げる一夏がいた。

「おねーちゃんが先に行つて」

「へ？わたしがですか…」

「うん、おにーちゃんが嫌な予感がするから……って」

「嫌な…予感？」

「もしおにーちゃんを狙うなら私とおねーちゃんて迎撃、私が狙われたらおにーちゃんとおねーちゃんが迎撃、おねーちゃんが狙われたなら……私とおにーちゃんて迎撃する、最悪……殺す」

「ころ…殺す！？どうしてそこまで」

「それはおにーちゃんに聞いて、私はもうおにーちゃんに守ってもらっただけじゃないから、今度は私がおにーちゃんを守る」

「……………」

「どうした織斑」

「いや…何か嫌な予感がしてね」

何だろう…殺意じゃない、もっと単純ななにか

「お前の感はよく当たる、それにオルコットの様子も気になるな」

「……確かに」

僕が話しかけても反応がなかったし…多分僕に負けたのがまだ心に残って…

「無理しないといいんだけど」

僕は再び空を見ると視界が真っ暗になった。
そして気が付くと地面に叩きつけられていた。

「がっ…!!」

「一夏!？」

「織斑君!？」

僕が目を覚ますと、夕方になっていた。しかも片目が見えないときた

「医務室か」

「そうだ。約6時間、お前は眠っていた」

僕が声の主を探して首を向けると額に冷たくて固いモノが当たった

「男の寝顔を見る趣味はどうかとおもっけど、それに銃を突きつけるのもね」

「一度死ぬか？」

僕は銃を手で払いのける、影で顔が隠れていたがその影が消えて顔がはっきり見えるようになった。

「時之 裕也、まさか君が日本に来てとは思わなかったよ」

「ロシアの支部でクロノスの武装を積んでいたさ、だが友が倒れたとなっちゃあ飛んでくるさ」

へえ…あの機体がロールアウトしてたんだ。

「で、本題は？」

「ブルーティアーズのブースターに細工されていた」

…………それはとても僕を不快にさせる内容そうだね、イギリス政府はよほど自国を灰にしたいのかな

「俺の推測だが…それでもいいか？」

裕也はスポーツドリンクが入った容器を僕に渡しながら聞いてくる…妙に嬉しそうな表情をしながら

「そうさせてもらっよ……今は少しでも情報がほしい」

「わかんと思うがこれはお前を殺す為にやった」

「そつだろうね、結構恨みを買っような生き方をしてたし」

「やり方はこうだ。まずブルーティアーズに細工をしかけてわざとお前と事故するようにする

もしぶつかつた衝撃で一夏が死ぬなり重症になればそれでよし、な
んともなければ機体をドカン！！代表候補生もろとも一夏を殺す……
……って感じたが、それと気になる情報があつてな」

僕はスポーツドリンクを飲んで医務室に配置されていた机の上にあつた携帯をもつ

「それは何だい？」

「つい最近ブルーティアーズが非公式でイギリス政府がドイツに渡したのさ、一時的とは言え操縦者に無許可でな」

「セシリアが簡単に渡すとは思えないけど」

「そこは上手くやつたんだろ、それより携帯なんか持ってどうする」

「……いや、こんなに話し込んで聞くのもあれだけど大丈夫なのかい

「？」

いくらIS学園とはいえ政府の犬に盗聴されることがあってもおかしくない

特に僕の場合は政府に恨まれる生き方をしてるしまあ電話より直接話したほうがいいだろうね

「結界を張ってるから見られることも聞かれることもない、じゃあ俺はロシアに戻るとするか」

そう言つと裕也はすーっと消える

僕はベッドから降りて携帯の画面を見る

「あ…夕食の時間だ」

「…………あ、あの…一夏さん」

「やあ、大丈夫だったかい？」

僕は何食わぬ顔で食堂に向かって鯖味噌定食を食べていたら食堂が

ざわめきはじめて、微妙な距離で僕をまじまじと見る
そんな視線に鬱陶しさを覚えていたらミートスパゲティを持って席
を探していたセシリアと出会う

「わたくしの不手際で一夏さんに迷惑を」

「気にしないでいいよ、大したゲ力でもないし」

僕は味噌汁をずっと飲みご飯を食べる
すると女子が2人、僕に近づいていた。

「織斑君！今日夕食の後って暇？」

「……暇だね」

「じゃあ夕食の後付き合ってね！！」

そう言い残し2人の女子は帰っていった。
そつえばもうパーティーするんだっけ、まあたまにはリフレッシュ
させてもらおうかな

「……織斑くんクラス代表決定おめでとうー!!」

これは変わらないな……嬉しいことは嬉しいんだけど

「僕の為にありがとう……こんな素晴らしいパーティーを開いてもらって」

「珍しいな一夏、パーティーとかの類は苦手だっただろ」

「……まあね、でもせっかくだし筈も楽しみなよ、そこで緋和はしゃいでるし」

用意したお菓子に興奮した緋和はいつにも増してはしゃいでいる、
よっぽどお菓子好きなんだね……今度作ってあげよう

「セシリアも気にしないで楽しみなよ」

「は、はい!」

やれやれ、今日は徹夜か……よほどイギリスは理解力が乏しいのか、

そんなことをしたらどうなるかフランスとドイツを見たらわかるだろうに、そうだね……経済的に苦しめるのもアリかな？

「君が噂の織斑くんだね、新聞部副部長、二年の黛薫子です、はいこれ名刺！よろしくね、インタビュー受けてくれるかな？」

「僕でよかつたら答えられるだけ答えるよ」

こうして始まったインタビュー、今回はどんな感じなのか不安だな……

「じゃあまずは一つ、ズバリISの起動時間は？」

「……さあ？約千時間らしいけど、詳しくは知らない」

「え？わからないの？なら次の質問、ずばり所持するISの数は！」

凄いことを聞いてくるな、まあ別に答えても問題ないし適当に……
って僕自身ちゃんと把握してないしね、結構難しいな

「僕が把握してる限りでは10機かな？」

「うわ…凄い」

「そんなに」

まあ驚くのも無理もないかな、僕だってこんなに必要なのかよくわからない部分もあるし
それに零式と黒騎士に至っては渡されたいけど僕の手元にな
し千冬姉さんの手元にな

「じゃあ最後にビシッと一言お願いできる？」

どうせ盗聴してるんだろうし啖呵でもきつておこうか

「そうだね…僕にケンカを売るなら多少覚悟しておいてね
それと僕は守るためならどこまでも最強を目指して強くなる、だからあまり僕を怒らせないでね」

みんなポカンとしてるけどこれでいい
これで迂闊に手を出せないだろうね、とりあえずイギリスへの攻撃
はまた今度にしよう

「僕が答えられるのはこれぐらいかな？」

僕は近くにあったジュースを手に持ちみんなを見る

「さあ、楽しもうよ」

「強くなつたね箒」

「また負けた…くそっ」

僕は早朝いきなり箒にたたき起こされ訓練につきあわされた。
やっぱり天才だと痛感したね、どんどん強くなってる…ただこれだけ強いと紅椿が追いつくのかな？
たしか紅椿の後継機の紅蓮椿があるけど果たしてどうなることか

「ねえねえ聞いた？2組に転校生が来たって」

「知ってるー！噂だと代表候補生らしいよ」

ああ…そう言えば彼女が来る日だったね

本当は迎えに行こうかと思ったけど時間が無かったし、彼女なら心配ないだろ

「久しぶりね一夏、元気してた？」

噂をすればなんとやら、道のド真ん中でボストンバック片手に仁王立ちをしている噂の転校生、そして僕のサード幼なじみである猫娘もとい鈴が変な笑みを浮かべて僕を見ていた。

お詫びと予告

フイムです、突然ですが孤高の一夏は更新停止になります。

理由は原作を見て、このままだと7巻にいくまでに一夏の性格を保つ自信がないからです。

身勝手な理由ですみません

懲りずにまた新しいのをやります。その予告をします。

俺は誰よりも強く誰よりも優しくなりたかった。

「これが…ISなのか、装備するまで実感もてなかったがすごいな」

「そうですね、とりあえず説明しますと、バカ一夏専用のIS『零騎士』はあなたの過去の戦闘に関するデータをすべて閲覧し、装甲や武装を厳密に厳選して造られた最高の機体です」

俺に与えられた最高の力、この力で俺は

『緊急事態が発生しました。再び日本に向けてミサイルが……』

『これは…人が起こしたもののなか…？』

突然の悪夢、再び

「まさか…東さんが」

「あの馬鹿ならやりかねないでしょうね、しかし彼女は…」

「わかってるよ、今あの人は意識がない、ならできる人間は限られるな」

「織斑 千秋か（ですね）」

『僕の弟はどれほど強いのかなあ、たかが数千発のミサイルなら5分で撃墜できるよね』

「零騎士の装備は？」

「今使えるのはBE-365『クロウ』が2丁、BE-01『タイタン』BE-44『ケルベロス』です、ミサイルは後20分で日本に到達します、突貫品ではありますが試作ブースターがありますがどうしますか？」

「…ブースターを付けてくれ」

「了解しました。それでは」

数千のミサイル、すべて落とさないと日本は

『バカー夏、出撃してください、ブースターを射出しますから』

「…了解、織斑一夏…零騎士、出撃する」

俺は…強くなりたい

I・S インフィニット・ストラトス…強キ者 優シキ者…

といった感じです、本当に申し訳ございません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4333r/>

インフィニット・ストラトス～孤高の一夏～

2011年8月31日12時21分発行